



Title	トマスの知性と意志の相互包含についての部分的考察
Author(s)	高岡, 尚; Takaoka, H
Citation	基督教学, 13, 68-75
Issue Date	1978-09-14
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/46355">https://hdl.handle.net/2115/46355</a>
Type	journal article
File Information	13_68-75.pdf



## トマスの知性と意志の相互包含に ついての部分的考察

高岡尚

『神学大全』[I, q. 82, 4; I-II, q. 9, a. 1]、『悪論』[q. 6, a. unic. c.]は、人間本質の諸能力が、相互にその優位性において包含し合うところの、上位の二能力、知性と意志によってうごかされていることを、各々異った前後関係の中で、述べている。

### 一、知性と意志の<sup>(2)</sup>作用における相互包含

しかし、この三つの章は、それぞれの能力から出された作用における、知性と意志の相互包含に、視点を限定している。即ち、

『悪論』[q. 6, a. unic. c.]「人間においても同じく、知性的認識をする形相と、知性<sup>(3)</sup>によって得られた形相を追求する、意志の志向作用がある。

……従って、善いものそれ自体 (bonum) も<sup>(4)</sup> (知性の作用によって) 認識されることが可能な、ある特定の形相である面において、ある特定の真なるもの (verum) であり……。又、真なるもの (verum) それ自体も、知性的作用の志向的である点で、ある特定の善いもの (bonum) として、善なるものの中に含まれる。

……知性的に知られた善が、意志をうごかす。

……こうして、意志は自分自身をうごかし、又、他の全ての能力をうごかす。何となれば、私が望むから、私は知性的に認識する。同じく、私が望むから、私は全ての能力と習性を用いる。」

『神学大全』[I, q. 82, 4] 「知られた善は、意志の目的となり、目的として意志をうごかす。

意志は、作用者として (per modum agentis) 全ての他の能力を、各々の作用に向けてうごかす。

全ての存在者と全ての真理を認識する知性は、善一般を志向する意志、あるいは、ある特定の作用をする部分的能力としての意志に対し優位を持つ。なぜなら、知性が認識する、存在者と真なるものの一般形相の中に、意志それ自体、意志の作用、意志作用の対象、が全て包含されるからである。

ある特定の作用を持った、ある部分的能力としての知性に対しては、善一般を志向する意志の方が優位を持つ。なぜならば、知性それ自体と、知性的認識作用と、真であるところの知性作用の対象、の一つ一つは、(志向対象としての) 善いもの、の一例に過ぎないからである。従って意志は知性をうごかすことが出来る。

これらの諸理由にもとづき、知性と自由意志が、自らの作用によって (suis actibus) 相互に包含し合うことがわかる。なぜなら、知性は、意志がのぞむということを、知性的に知り、意志は、知性が知るといふことを、のぞむからである。」

『神学大全』[II, q. 9, a. 1] 「主体 (理性を指す) のうごきは、何らかの作用者 (意志を指す) から与えられる。しかるに全ての作用者は、目的のために作用する。だから、この作用者 (意志を指す) の、作用の源は、目的である。(この目的は、知性が、その作用によって提示した善である。)

……意志は、善いもの一般を、自らの目的として志向し、意志に従属している諸能力 (I, q. 84, 4) では、この中に知性が含まれる) をうごかす。

……対象、目的は、形相因のようにして、作用を規定する、という形で、作用者をうごかす。しかし、第一の形相因は、存在者と真なるものであり、その二つは、知性の対象である。したがって、知性は、意志に意志の志向目標を提示すること、によって、意志をうごかす。」

## 二、知性と意志の、能力における相互包含

ところで、引用した各章の中には、知性の作用と意志の作用同志の優位性における相互包含にとどまらず、知性能力と意志能力における、優位性の相互包含を示唆する部分が散見される。

『神学大全』[I, q. 82, a. ad 3]「人間の作用の最初は、知性にある。なぜなら、全ての意志のうごきを、認識が先行しなければならぬ。しかし、一方、意志のうごきは、全ての認識作用に先行することはない。」

つまり、意志の作用は、必らず、先行した認識作用を前提するから、一番最初に、いかなる意志の作用をも受けないところの、第一回目の知性的認識作用が、存在したことになる。又、第一回目の知性的認識以後にも、日常において、意志作用による惹起を受けない、純粹な知性的認識が存在することに、この機に留意しておきたい。

そして、『神学大全』[I, II, q. 109, 1, c.]によると、この第一回目の知性的認識作用は、それ自体、知性的光の行使である。ところで、能力の行使は、ある種のうごき、又はうごかされ、である。従って、知ることは、広い意味のうごかされ、である。しかるに、

「物的事物においては、うごかされ、作用の原理として、形相が要求されるのみならず、第一動者のうごかしも要求される。

同じように、物的、そして精神的うごき、うごかされは、神である第一動者から由来する。故に、いかに物質的、靈的本性が完全であっても、神にうごかされずに、自己の作用に踏み出すことは不可能である。

しかるに、そのうごかしは、神の摂理の理念に従ってなされる。……

そして、第一動者である神から、全てのうごかしが発せられるのみならず、第一の作用として、全ての（うごかしの）形相的完成も、その同じ神から由来する。

そのように、知性の作用、そして被造物存在の全てのものは、この二点で、神に依存している。即ち、第一は自分がそれによって作用するところの形相を、神から受けること。第二は、作用の起発執行(exercitium)のために、神によってうごかされること、である。」

つまり、トマスによれば、意志の作用に依存していない純粹知性的認識も、うごかされ、うごきの一種であり、第一動者からの、形相（知性的光）と最初のうごかし、を受容しなければ、成立しない。ここには、知性作用以前における知性作用の根源に関する指摘が見られる。

そして、人間の、全ての知性作用、意志作用は、この知性能力における、神からの最初のうごかしによってのみ、存在が可能である。なぜなら、意志の最初の作用は、知性の第一回目の作用を前提するからである。

しかし、第一回目の意志作用の起発執行(exercitium)は、意志そのものから出るにしても、そのための存在論的必然要十分な根拠はどこに求められるか。

『悪論』[q. 6, a. unic, c.]によると、「意志が、強制や必然によって、うごかされるのではないこと、を証明するために……意志のうごきを、作用の起発執行と、作用の規定(specificatio)の二面から、考察する必要がある。

作用の起発面から考察すると、意志は、考慮(consilium)に従ってうごくが、考慮は論証的検証ではなく、相反する複数の可能性の上に成り立っているため、意志が、必然性によってうごくことはない。しかし、意志は、常に考慮を持つことを望んではいないので考慮を持つことを望むべく、あるものによってうごかされなくてはならない。もし、意志が、完全に自力で考慮を持つことを望み始める、のだとすれば、意志のうごきの前に、又、考慮が先行

せねばならず、その考慮にも、意志が先行せねばならない。しかし、この事態が無限に進むことは不可能であるから、現実には、望み作用を常に行なっているわけでない、全ての意志の、第一回目のごごぎに關しては、外なる何者かによってうごかされ、そのうごかされによって、意志がのぞみはじめる、と結論づける必然性が出て来る。

……従って、最初に、知性と意志をうごかすものは、知性と意志の上位のもの、つまり、神である。」  
ところで、同じ、『悪論』(a. 6. a. univ. c.)の前の部分に、

「しかし、作用の起発執行は、そのうごかしを原因する作用者から来る。しかし、うごかすものは目的のため作用する。従って、作用の起発執行についての、うごかしの第一原理は目的から来る。」

とある。のぞみの対象になる全てのものの中にある第一原理、つまり善を、一般的に志向する動力の作用のように、全く規定性を持たない、いかなる名称もあてはまらない、純粹志向性は、第一質料が、それ自体として、純粹な形で存在し得ないのと、同じ理由で、実際には存在しない。神、このうごかしの第一作用者の意図の中で、無規定の善一般への志向性と、ある特定の目的設定の二つは、すでに綜合されている。そして、その特定の目的は、被造物の形相、そして、ここでは人間の形相の中に実現している。

### 三、人間的形相

トマスにとって、人間の本質は、その有限性を反映して、多数の能力群の中に成立している。有限な本質は、その本性よりして、複数の能力を流出し、又、それら諸能力の形相的諸対象が、各々、あるべき主従關係に調整され合う形で、その本質全体としての作用が営まれる。

『神学大全』(I. 1. 2. 2.) 「人間は、普遍的で完全な幸福を追求することが出来る。なぜなら、幸福に到達出来るからである。しかし、人間は、幸福に到達出来る存在者の中の、最下位にある。従って、多数の異った作用と能力を、

人間の靈魂は要求する。」

しかし、人間の本質の諸能力は、各々の能力の中で、より高い完全性を持つ能力が、より低い完全性を持つ能力に對して、優位にあり、後者は前者に依存する。この依存秩序においては、知性的諸能力（知性と意志）が、感覺的諸能力より優位であり、前者は後者を、指導し命令する。

『神学大全』[I, q. 77, a. 4; *ibid.*, a. 7, c.] 「完全な能力が、不完全な能力より優位であるような、本性に基づく順位としての、能力間の依存關係においては、知性的諸能力（知性と意志）が、感覺的諸能力に對して優位であり、知性的能力は、感覺的能力を、指導し、命令する。（*dirigunt eas, et imperant eis.*）」

「（このような順位にある各要素においては）第一のものにより近い要素が、より遠い要素に對して、何らかの意味での原因である。……その結果として言えることは、完全性と本性の秩序において、より優位にある能力は、他の諸能力の目的であり、作用的原因である、という形で源泉である。何となれば、感覺は知性のために存在するが、その逆ではないことを、私たちは知っている。」

『神学大全』[I, 89, q. 4, c.] 「秩序づけられた。多くの諸能力の中では、普遍的目的に直接志向する能力が、部分的目的に直接志向する諸能力をうごかす。」

従って、トマスにとって、人間の形相は、その不完全性の故に、多数の諸能力のうち存在し、生命を展開しているが、諸能力の存在の意味と中心は、知性能力と意志能力の二つであり、他諸能力の存在意味は、知性的二能力の完成にある、と結論出来る。

従って、人間が、第一回目の意志作用（既に、第一回目の知性作用による、善の提示が前提されている。）に實際に入る前に、神から与えられ、その第一回目の意志作用の起発執行の必要充分な原因となり、その起発執行の中に結果として顯われることになる、うごかしは、第一回目の純粹知性作用を行なう以前の、知性形相を、必然的に、自ら

のうごぎの規定とすることになる。

#### 四、純粹能力状態における知性と意志

知性と意志が、第一回目の作用に入る前の状態。それは、純粹の知性能力、純粹の意志能力である。あらゆる作用以前の能力、純粹能力とは、その能力の第一回目の作用の全可能性を規定するところの、先与的諸条件の総体であり、第一回目の作用以後、多くの作用展開をするであろうところの能力が、原初の形で捉えられたものである。前項で特定して来た、第一動者の最初のうごかしは、この純粹能力に具体化されている。

しかるに、この純粹能力の状態における知性と意志の関係は、次のように要約出来る。

知性能力の純粹状態と、意志能力の純粹状態の関係は、作用の起発執行を規定する能力 (specificatio) と、規定化を受ける起発執行能力 (exercitium) の関係。形相 (forma) と動力 (dynamismus) の関係である。この能力の純粹状態は、個々の具体的作用ではなく、個々の具体的作用の先与条件の総体であるので、知性的作用と意志的作用は、様々の具体的外的条件によって変形はしても、基本的には、各々の能力の純粹状態における相互関係を、保つのである。

#### 五、若干の結論

イ、トマスにおける、知性能力・意志能力の純粹状態の相互関係、を確認することによって、我々が、作用水準における知性と意志を見る場合に陥いるかもしれない、一つの危険性が明らかとなる。

作用水準で、知性と意志の優位性における相互包含を論じる場合、あたかも、知性と意志が、独立した、相互に外的因果関係しか持たない、二つの自立的存在者であるかのような、錯覚が生じやすい。しかし、純粹能力水準にある知性と意志は、トマスにとっては、全体としての一つの人間生命の、規定性と動力性なのであった。

『神学大全』[I, q. 87, 4, ad 1.]には「知性の中にあるものも、意志の中にあるものも、両方共に、一つの実体に根ざしており、又、一方は、もう一方の（存在と作用のための）源泉でもあるので、その結果として、（一つの実体の中において）意志の中にあるものは、又、同時に、ある意味で、知性の中にもあるのだ」ということになる。」とあり、又、『神学大全』[I, q. 75, 2, ad 2.]によると、

「自らの中に自立存在を持つものに、自らによる独立の作用は帰せられる。本来、自らの中に、自立存在を持つものは、何かのものの部分ではない。従って、部分の諸作用は、部分として、全体の作用に帰せられる。だから、人間が眼で見るといふ。従って、靈魂が認識するということも出来るが、人間が、靈魂によって認識する、という方が、より正しいのである。」

ロ、人間における、この上位二つの能力、即ち、知性能力と意志能力の純粹状態において、人間が、善なるもの全てを志向する欲求である意志能力によって、真なるもの全てとの一致をすることの出来る許容量を持った形相能力、即ち知性能力において、全ての存在者との一致への志向を生きるものであること、が明らかとなる。

ここに、意志の作用によって特別に惹起されたわけではない知性の作用、つまり純粹の知性的認識、そして、意志の第一回目の惹起作用の前提原因になるところの、第一回目の知性的認識作用が、人間本質の完成を目ざす、本来の意味の人間の行為としての重要性を持つことも、結論づけられる。

註

- (1) 「能力」。potentiae の訳。
- (2) 「作用」。operationes, actiones の訳。
- (3) および(4) 引用内の傍点と括弧は筆者による。